

丁長遺跡（第2次）発掘調査報告

2007年 12月

三重県埋蔵文化財センター

卷頭子第 1



S E 60° 2' 63"

A

序

多気郡明和町は、三重県内を北流する櫛田川と宮川によって挟まれた洪積台地に位置し、国史跡斎宮跡をはじめとする歴史的遺産が数多く存在します。

今回発掘調査を行いました丁長遺跡は、明和町のほぼ中央部を流れる笛笛川左岸に位置し、平成18年度総合河川流域防災事業二級河川笛笛川に伴って発掘調査を実施したものです。当遺跡の発掘調査は平成18年度国営宮川用水第二期土地改良事業に伴う調査に統いて2度目になります。第1次調査では、古代官道と考えられる道路遺構をはじめ、中世の溝・土坑など多数の遺構とそれらに伴う遺物が確認されました。今回の調査では、第1次調査で確認された溝の続きのほか、井戸や土坑などが見つかりました。これらの発掘調査成果が、より多くの方面で活用されることを切望するものであります。

なお、調査にあたっては、地元の方々をはじめ、明和町、および関係各位から多大なるご協力と、温かいご配慮を頂くことができました。文末とはなりましたが、各位の誠意あるご対応に、心から御礼申し上げます。

2007年12月

三重県埋蔵文化財センター
所長 吉水康夫

行記

1. 本番では三重県多気郡和田岬町宇摩長・上原リに所在する「長進塾」の第2次発売場所にかかる報答書である。
 2. 本選手の調査は、平成18年度総合河川流域防災実業二課御伊豆川に伴い、三重県教育委員会が三重県環境部河川課から延長の報答書を受けていました。
 3. 事あおよび認定は次の通りにより実行した。
 - 調査主体 三重県教育委員会
 - 調査担当 三重県環境セイゼンセンター 調査官を工課
坂伊・野瀬美沙子・技術課内閣・小林裕之
 - 主な記載 有償会を設立する旨
 - 面積 1,400m²
 - 期間 平成18年5月16日～平成18年7月24日 4. 調査に当たっては、沖のところをはじめ、三重県環境部御伊豆・松阪法事室課所長と連絡2回、甲和田からの協力を得た。
 5. 本番の就業・構造は野瀬美沙子・小林裕之が行い、就業企画については多くに電卓した。なお、主な整理作業、手書き成績は調査担当者と現場で確認が行った。
 6. 現地の調査および報答書の作成にあたっては、以下のところにご指導・ご協力をいただいた（順不同、敬称略）。
 - 権木寅之（前三重県環境部長）・青木正義（現三重県環境部セイゼン課所長）
 - 木沢吉一（現三重県環境部セイゼン課所長）・小林秀（三重県環境セイゼンセンター構成員G）
 - 丸山良男（企業公認職業紹介会員会員）・藤井比呂（愛知県環境省）
 - 明和町・三重県環境部御伊豆・三重県東海地方県民局法事室課所長連絡
 7. S E60MIIの木丸について解説すると、昔書かれておりながら映写機映写機を購入してから映写機で映写を所で替わりし、その成りをIV章、V章に掲載した。また、写真については各現カラーおよび写真を8～9に掲載した。
 - また、S E60MIIの製品（ズーム）の解説を株式会社パレオ・ラボに依頼し、その成りをV章に掲載し、写真については写真を10に掲載した。
 8. 事あは、三重県環境セイゼン（セイゼン）の沿線駅に準拠して行い、主報答書もそれに準じて記述している。従って本書ではすずは、三重県環境セイゼンの沿線駅を記している。なお、サトノ・セイゼンの沿線駅については、（ ）枠に記述している（小数点第3位以下は四捨五入）。
 9. 本報答書での進捗番号は第1次事あからの進捗となっている（51から）が、第1次調査において検討された進捗と第1の進捗は第1次調査時に使用された番号を記している。また、番号の頭には、えたの番号によって「」の略記号を付けた。ただし、ピットは小津を1に1から番号を付与しているため、略号の前に小津を記す）している。

SK : 予算 SD : 溝 SE : ズーム SZ : 下限追跡 P : ピット

 10. 本番では、主として進捗の在庫について小津・竹原編「新規標準化」（14版1994）を使用した。
 11. 本番で報答した記録・進捗書は三重県環境セイゼンセンターで保管している。

目 次

I	前 言	1
II	色 傳 と 環 境	3
III	遺 構	6
IV	遺 物	15
V	自 然 科 学 分 析	22
VI	結 論	23

挿 図 目 次

I	前 言	
第 1 号	調査区色傳写	2
第 2 号	調査区地質写	2
II	位置と環境	
第 3 号	進歩集落地形写	4
第 4 号	進歩集落色傳写	4
III	遺 構	
第 5 号	I空遺構写	6
第 6 号	II空遺構写	7
第 7 号	I空廁所廁所写	8
第 8 号	II空廁所廁所写	8
第 9 号	SD24・36・39・57廁所写	9
第 10 号	SD37・52廁所写	9
第 11 号	SD53廁所写	10
	等 12 号 SD55・SK54廁所写	10
	等 13 号 SE51廁所写	10
	等 14 号 SZ58・ピット廁所写	11
	等 15 号 SD59・61・62廁所写	12
	等 16 号 SE60廁所写	13
	IV 遺 物	
	等 17 号 日本遺物写	15
	等 18 号 SE60日本遺物写	17
	等 19 号 SE60日本遺物・蟲類等写	18
	等 20 号 SE60日本遺物写	19
	VI 結 論	
	等 21 号 第 1 次・第 2 次調査検出品	
	写真	24
	等 22 号 フ長進歩廁所群と久保の関係	25

写真図版目次

写真写真 1	SE60日本廁所	
写真写真 2	調査区廁所・I空廁所	29
写真写真 3	I空廁所・SE51廁所状況	30
写真写真 4	II空廁所・SD62廁所	31
写真写真 5	SD60日本廁所・SE60日本廁所	
	廁所状況	32
	作業員写・調査隊写	33
	等 6 号 日本遺物	34
	等 7 号 SE60日本遺物①	35
	等 8 号 SE60日本遺物②	36
	等 9 号 SE60日本遺物③・SE60日本	
	木村の元学園跡写	37
	等 10 号 SE60日本写・伊藤の元学園跡	
	写真	38

表 目 次

III	遺 構	
第 1 号	遺構・廁所	14
IV	遺 物	
第 2 号	日本遺物寫	20
第 3 号	SE60日本木製品寫	21
	V 自然科学分析	
	第 4 号 植物生定期	22

I 前言

1 調査に至る契機

「長進軍は名を郡和田重清^{ミタタカ}、長・二極^{ニケイ}に所をとする。この進軍は生^リ伊弉諾^{イザナギ}のうちに在専し、^ル代伊勢守のば長部にあたるが其性が悪かった。このため、^ヲ成^ル17度^{シテ}首川^{シハツカワ}ノ第^ニ御^ミ三^ミ改^{ハシ}其事に伴^ハって、範^{ハシ}道^ミ遣^{ハシ}謀^{ハシ}ト^{ハシ}が行われた。その結果、近城^{ミツシマ}の守護主生^リ小^シ瀬^セ部^ヒにおいて^リ代道路の謀^{ハシ}とえられる^{ハシ}行^{ハシ}する^{ハシ}2久の渕^{ハシ}が^{ハシ}伏^{ハシ}され、^ヲ長進軍として新規^{ハシ}設^{ハシ}された。これを受けて^ク成^ル18^ノ4月^ノ10^日～生^リ6月^ノ7^日にかけて^{ハシ}其事^{ハシ}（第^一次謀^{ハシ}）が^{ハシ}了^{ハシ}された。

今朝の発達済み（第2次済み）は⁹成18歳皮脂細
神川流域筑紫平野・神川管答川に付いた。事
事亭に¹⁰立ち成18歳3月29日～3月31日に範宇連
済みを行った。済みは3,200mをめ集めてトレンド
状の進捗状を事で行った。その結果1,400mに
ついて進捗が付いているものと判断した。

これを受けて関係部署と協議をすねた。その結果、現状役員が内輪であるとして登録済み(第2次選手)を実行し、選抜役員をすることになった。

2 調査の方法

(1) 開音子音

第18回 3月に行われた蛇口確認調査の結果、退場の右側は車間1,000m、左側400mの二箇所に分かれていることが確認された。従って、車間の調査をIを、左側の調査をIIとした。

(D) 滑離の延長部は第 1 次は定された。

冲縄部については「第二回標」(リタ復帰率)を基に第1次調査において事実された冲縄部を沖縄へ منتしたものを採用している。第1次調査ではトトロとして100m²果でトトロを事実とし、中からA～Dトトロとしている。さらに、4m²果でトトロを事実としている。

従つて、第2次事象ではこの $\Delta\phi$ 部を跳過し、I \pm は E^{miss} 、II \pm は F^{miss} に変更した。なお、 $\Delta\phi$ についても π から π にA~Y、 π から π に1~15を割当した。

(3) 運行設置

講義では全般的なヨウ素は縮小 1/50、また脳脊髓では
は縮小 1/20で書き生没を行った。また、各進帰の
既往的な生没歴が从むるものについては縮小 1/10で
書き生没を行った。

3 調査の経過

(1) 門窗裝置

講演会の現況はやはり、講演二と八の床三若進橋までを五橋で展示し、ハイにより進橋の検討、墨脱を行った。注文に参加していただいたのは、甲和町在住の方々である。これから感謝いたします。

(2) 腹痛伴便祕。(少)

事件の経過に契しては「^ア」の通りである。

2006

5月17日 現地協商。

5月25日 1号系三型即開始。

5月26日 Ⅲ空手道開始。

6月19日 空入才提审開始。

6月20日 I空道橋架設完了。II空道橋架設開始。
6月21日 II空道橋架設開始。SD62は轟き空の
さらに北側へ続くと思われるが、協調
の結果、進捗が全くなく、半張の从も
ナカニシレガリ

6月28日 S.E.60打撃課を検討

6月29日 13：00 誓言安全宣誓会

7月3日 通海大河带。

7月6日 SE60が戸頭手を裁。電気木の上
から木を下に引くと戸頭の木は倒れ

7月22日 SE600重機影袋 才良瀬駅より三

7月10^日 SE60 SZ58断續 且空飞及碰撞

7月11日 SE51新种。1号飞鼠玻璃。

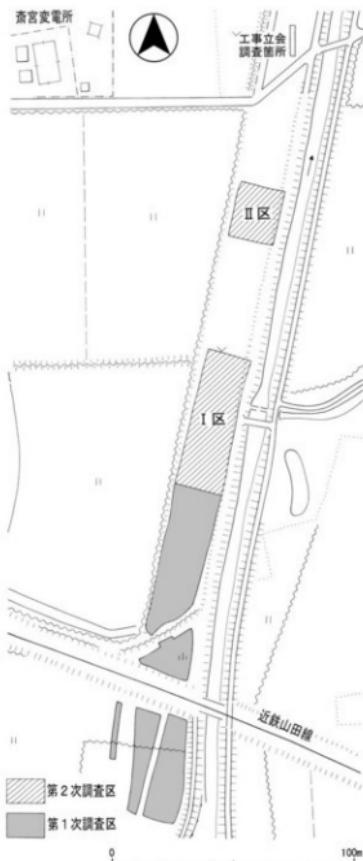
7月15日 三度詣り。引渡し。

(3) さくら会議室

さくら会議室、昭和19年1月31日にII区のさらに北側の地区においてこまどり会議が行われた。議事録は30.0mであったが、道幅・道幅とともに確認されておらず、こまどり会議室は道路の範囲内にあたる可能性が高いことが確認された。

(4) ヤマト母屋浜辺にかかる説道場

さくらにかかる関係法令の施設では、以下により行っている。



第1回 附設子会議室 (1 : 2,000)
〔昭和19年1月31日〕
〔昭和19年1月31日〕

・堀掛畠の東字新宿 (矢印付保法99条第1項、

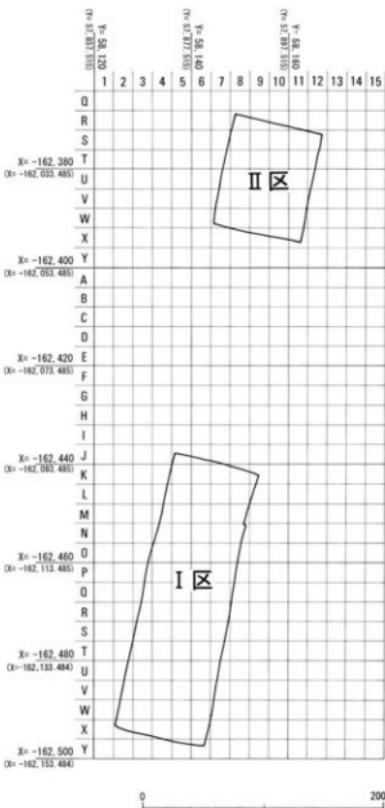
豊岡市立役場センター所長→堀掛畠)

昭和18年5月17日付け 番号77号

・やまつり祭り、誕生日会 (道矢付、界所有者→松葉警察署長)

昭和18年8月3日付け 番号第12-4-4号

(野瀬 えみ子)



第2回 附設子会議室 (1 : 1,000)

II 位置と環境

1 地理的環境

「長道夢(1)」は、名古都町和田¹⁾ 畠宮字²⁾ 長・上横³⁾ に位置する。このように、畠宮⁴⁾ は木宇⁵⁾ 「畠宮」の字に含まれているが、著名的な追夢である「夢畠宮夢」の範⁶⁾ である。畠宮夢の奥深⁷⁾ より見ると約600mの瀬⁸⁾ にあたる。

甲和町⁹⁾ のさき部は分水¹⁰⁾ にあるが、「長道夢」は分水間にある谷底¹¹⁾ 斧石¹²⁾ に位置する。標高は約7mである。

畠宮¹³⁾ の奥には竹守川¹⁴⁾ が流れる。竹守川は甲和町¹⁵⁾ を流れる全長約12kmの小規模な河川で、畠宮を周辺は甲和町¹⁶⁾ の御川¹⁷⁾ 等のため改名的な流れとなっている¹⁸⁾。

2 歴史的環境

周辺追夢についての概要是、「畠宮夢」の説を香若¹⁹⁾ で述べられているため、そちらを参照されたい。この前では、「長道夢」に関わる「代へ²⁰⁾ 型の周辺追夢のみ紹介しておきたい。

(1) 『手退跡』

「長道夢」の第1次事件は、第2次ヒヨウ成18²¹⁾ 年度に乍然²²⁾ された。近畿以南の灘²³⁾ では、古代の伊勢道²⁴⁾ と想定される追跡が検出²⁵⁾ されている。伊勢道は、「手退跡」をして伊勢道²⁶⁾ へ向かうものであり、これをもとに近畿の伊勢道²⁷⁾ (奈良街道) も成²⁸⁾ する。後述のように、「畠宮夢」の瀬²⁹⁾ には奈良時代の道の場所が検出³⁰⁾ されており、「長道夢」第1次事件ではその延長が確認³¹⁾ された。

近畿以北の灘³²⁾ (第2次事件³³⁾ 穏³⁴⁾ 沖³⁵⁾ では、摸倣時代の舟が数枚検出³⁶⁾ されており、このうち数枚は第2次事件³⁷⁾ をもとへ検出³⁸⁾ する。また、大変形尖頭器や廢³⁹⁾ 制⁴⁰⁾ 者などの器も出土⁴¹⁾ している⁴²⁾。

(2) 『手跡登録』

周辺の追夢で最も有名な追夢に「夢畠宮夢(2)」がある。畠宮は、「畠宮」と「手跡登録」をもつて所

(「畠宮夢」と呼ばれた令⁴³⁾ 室⁴⁴⁾ の起源である。「畠宮」は、木宇⁵⁾ に代わって伊勢神宮に奉祀するため伊勢に進むされた木宇の木戸⁴⁵⁾ または木戸⁴⁶⁾ のことである。木戸⁴⁷⁾ は木宇⁵⁾ のまゝ木戸を駆けの瀬²⁹⁾ とし、「木戸」、御蟹⁴⁸⁾ 木戸⁴⁹⁾ の「木戸」⁵⁰⁾ 木戸⁵¹⁾ 木戸⁵²⁾ まで約660m⁵³⁾ に亘っている。

「畠宮夢」では、昭和45年⁵⁴⁾ の発掘調査開始以来、多くの事⁵⁵⁾ 成⁵⁶⁾ をあげており、「畠宮」の全容が明らかになりつつある。

「畠宮夢」の範⁶⁾ については、およそ先⁵⁷⁾ 2km、東⁵⁸⁾ 700mである。戸川を先端に畠宮⁵⁹⁾ の上に形成しており、この下部では奈良時代の道、平安時代の木戸⁴⁹⁾ 木戸⁵⁰⁾ 木戸⁵¹⁾ 木戸⁵²⁾ の大溝⁶⁰⁾ が確認⁶¹⁾ されている。飛鳥～奈良時代には追跡⁶²⁾ 部に、奈良時代傍⁶³⁾ ～⁶⁴⁾ 安倍朝⁶⁵⁾ には木戸⁵⁰⁾ 木戸⁵¹⁾ 木戸⁵²⁾ から木戸⁵³⁾ 木戸⁵⁴⁾ 木戸⁵⁵⁾ 木戸⁵⁶⁾ に、そして摸倣時代には手⁵⁷⁾ び⁵⁸⁾ 部に追跡⁶²⁾ 、追跡⁶²⁾ が残⁶⁹⁾ し、「畠宮」の手⁵⁷⁾ が移動⁶⁹⁾ することが察⁷⁰⁾ えられている。また、現在の竹守¹³⁾ 木戸⁵³⁾ 木戸⁵⁴⁾ 木戸⁵⁵⁾ 木戸⁵⁶⁾ では、手⁵⁷⁾ び⁵⁸⁾ 部に、手⁵⁷⁾ び⁵⁸⁾ 部⁵⁹⁾ が検出⁶⁹⁾ されており、この手⁵⁷⁾ び⁵⁸⁾ が手⁵⁹⁾ にあたると想定⁷⁰⁾ されている⁷¹⁾。

前述のとおり、この「畠宮夢」は、「長道夢」とは約600mしか離れていない⁷²⁾ 近距離であるため、「長道夢」を守る奈にはきわめて重要な追夢である。

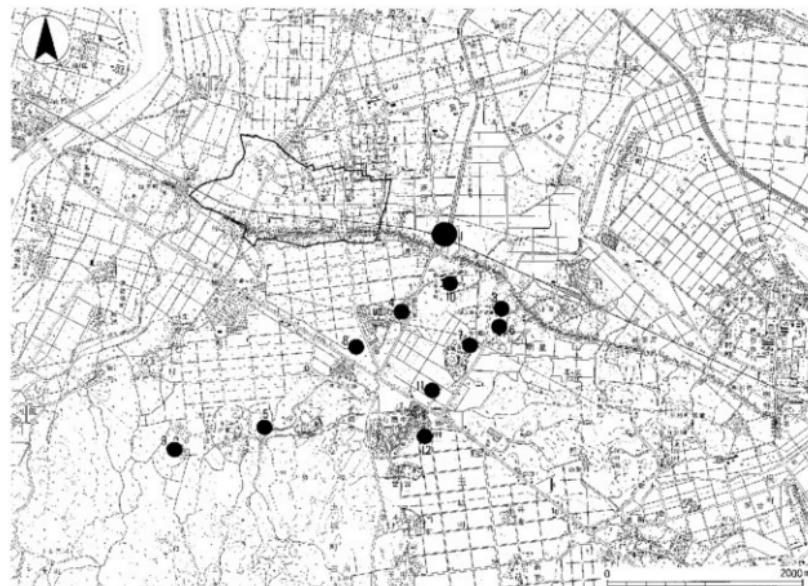
(3) 『他の退跡』

「長道夢」周辺には「畠宮夢」よりも多くの追跡が存在する。特に、甲和町¹⁴⁾ から弓削町¹⁵⁾ にかけての「有夢郡」では「伊勢道」を製作していた追跡がある。有夢郡は、古代より伊勢神宮の御上に用いる「御上御器⁷³⁾ 」器⁷⁴⁾ を作り続けていた所としてよく知られている。この有夢郡⁷⁵⁾ では、「手跡登録」器製作追跡(3)をはじめ、「伊勢道夢(4)」など20追跡で「伊勢道成⁷⁶⁾ 」が検出⁷⁷⁾ されている。

「手跡登録」器製作追跡は、現在「夢公像」として整備⁷⁸⁾ されており、成⁷⁶⁾ のほかに⁷⁹⁾ あらう墨⁸⁰⁾ 付⁸¹⁾ 等などが検出⁷⁷⁾ されている⁸²⁾。伊勢道夢では、6世紀前半から8世紀前半までの「伊勢道成⁷⁶⁾ 」が225基も検出⁷⁷⁾ されている⁸³⁾。P.Y.A・B追跡(5)では100基の「伊勢道成⁷⁶⁾ 」が検出⁷⁷⁾ されている⁸⁴⁾。



第3図 通称伊豆海岸 (1 : 10,000) [計画地内現状図 1 : 2,500より作成]



第4図 伊豆海岸 (1 : 50,000) [計画地内現状図「松原」「海岸」1 : 25,000より作成]

平安時代以降については、遺構が減少するものの、
弘長連夢(6)で平安時代末の「櫻院城に開拓すると
考えられる遺構が検出されたり⁶、大都連夢
(7)や延長連夢(8)では「伊御三官に開わる御内所
がある」⁷と記述⁸しているため⁹、連対と「伊
御三官」が併用されていたことがわかる。史料上でも、
御内所において「伊御三官に開わる「有外」」の名が見ら
れるようになる。しかし、9世紀と10世紀の間に断絶
があったことも明らかにされている¹⁰。このほかでは、
大都連夢で16世紀代に祇園遺構が築かれており、有
外御内所との関連性も増加されている¹¹。

鎌倉連夢では、大都連夢で12世紀後半ををみとする
堀¹²・栏¹³・門¹⁴等が見つかっている¹⁵。また、愛宕
連夢(9)では12～13世紀代の堀¹⁶・栏¹⁷・溝¹⁸・¹⁹門²⁰
が検出²¹されている²²。幕室跡でも京²³・所²⁴・連²⁵の御内所としての遺構が検出²⁶されている²⁷。

ほかこの辺には、室町時代には主²⁸御内所の跡跡
所だった安養寺跡(10)がある。當時は御内所として有
数の施設²⁹だったらしく、正門³⁰を氏の夙夜も受
けていたようである³¹。安養寺の成³²・馬頭³³ははつき
りしていないが、布施によると承永5年(1297)とさ
れている。允墨跡では、15世紀³⁴から16世紀後葉の
多くの遺構・遺物が確認されている。土塁をめぐる
幅4～5m、深さ2～3mの溝も確認されており、
その先端距離は約170mであったことがわかっている。
また、甲治御の沖落石によって布施³⁵も約200
mであったことが推定されている³⁶。

(小林 浩之)

[註]

- ①『甲治御跡』史料編纂・香川一透・寺原一（昭和47、2004?）。
- ②『甲治御跡』史料編纂・香川一透・寺原一（昭和47、2004?）。
- 『高麗使允墨跡をめぐる「有外」の調査』（高木勝也・宮内幹一、2001?）。

その戸越方石室³⁷を石室も再現されたい。

- ③『「長連夢允墨跡をめぐる御内所跡」』（三重県立歴史センター、2006?）。
- 『高麗使允墨跡をめぐる「有外」の調査』（高木勝也・宮内幹一、2001?）。
- 『甲治御跡』高木編（昭和47、2005?）。

吉川久文「高麗使の「有外」」（季刊『学』46、第1回、1994?）。

- ⑤三重県立歴史センター「高麗使の御内所跡」（『高麗使をめぐる御内所跡』）。

村松正則著者（甲府市歴史研究会・三重県立歴史会、1977
?）。

- ⑥三重県立歴史・文化センター「「御連夢(第2・3・4)」允墨跡をめぐ
る」（1995?）。

三重県立歴史・文化センター「「御連夢第5・6」允墨跡をめぐる
（1996?）。

- ⑦甲府市歴史研究会『P・A・御連夢をめぐる』（1991?）。

- ⑧三重県立歴史研究会『豊後63「臣民の御内所跡」御内所跡を
めぐる研究』（1989?）。

- ⑨三重県立歴史・文化センター「大都連夢(第2・3)」「大都連夢(第
2・3)・御内所跡」（1992?）。

三重県立歴史研究会「高麗連夢」（『豊後63「臣民の御内所跡」
御内所跡をめぐる研究』、1981?）。

- ⑩小林秀「「御内所における「御内所」」（『甲府見立』第1号、三重県立歴史・文化
センター、1992?）。

- ⑪三重県立歴史・文化センター「大都連夢(第2・3)」「大都連夢(第
2・3)・御内所跡」（1992?）。

参考文献不載。

- ⑫三重県立歴史研究会『丸岡連夢・愛宕連夢』（『昭和57年度歴史系
御内所跡と御内所跡をめぐる御内所跡研究』、1983?）。

- 井上信義「高麗の御内所跡」（『昭和57年度歴史系
御内所跡研究』、昭和57、2006?）。

- ⑯吉川幹一「「有外」の御内所跡」（『甲治御跡』史料編纂・香川一透・寺
原一、昭和47、2004?）。

『「有外」とその時代』（第25卷・三重県立歴史・文化センター、2006?）。

『「有外」とその時代』（第25卷・三重県立歴史・文化センター、2006?）。

III 遺構

1 I区

(1) 宝珠層

本層には、上から¹手(床底場合)・10YR4/2)、²井(鳴場合)・10YR3/4)、³井(にぶい井場合)・5YR5/4)、道橋検査井⁴および⁵井(道橋合)・10YR7/8)である。また、道橋検査井の⁶井は堆積できていないが、傍述するS Z58の⁷井から⁸手砂(2.5YR/1)や⁹手砂(5YR/1)など、砂層や砂礫層が確認されている。道橋検査井¹⁰の¹¹層には堆積物は含まれておらず、¹²井と考えられる。

(2) 伊賀時代の遺構

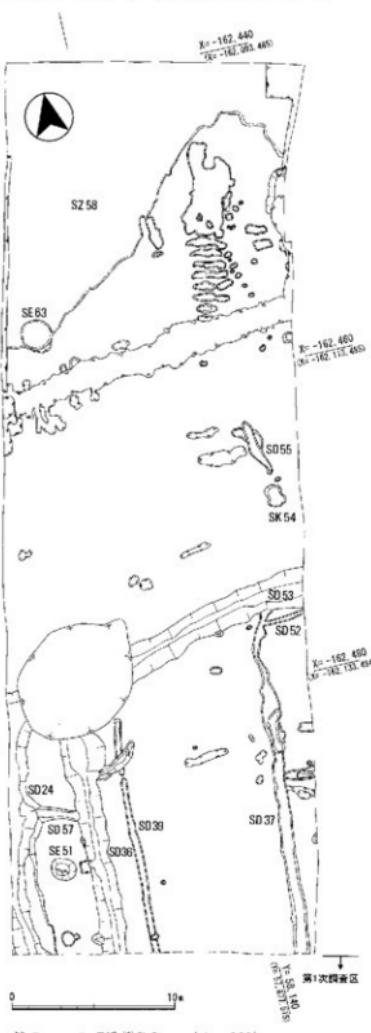
溝SD37 濕手を卓立部S 12~Y 11で検査した。第1冰床まで検査された溝の延長部で、長さ約22m、幅0.4~1.2m、深さ0.17mである。¹³井はおよそN 6° Eであるが、第1冰床まで検査部はおよそN 15° Eである。SD24・SD36・SD39とほぼ平行するが、SD37のみ溝手をの头部に位置し、¹⁴井の¹⁵井に近づいた溝からはやや離れている。¹⁶井は堆積は非常に少ないが、¹⁷代の¹⁸伊賀窯の痕跡が発見している。ただし、第1冰床では¹⁹平安時代も²⁰伊賀窯の堆積として捉えられている。

(3) 銀山時代の遺構

溝SD24 T 7~X 7で検査した。第1冰床まで検査された溝の延長である。溝手を充て検査したため、²¹井は下甲だが、長さ約17m、深さ0.69mである。第1冰床まで検査部をあわせると²²井はおよそN 2° Wである。²³溝の²⁴井は堆積に埋められるが、溝手を充てて伸びていくようである。ただし、毛伊野のSD24²⁵井のうち、²⁶井の部分は傍述するSD53の²⁷井であるが、²⁸井の部分には堆積物が見られ、道橋の²⁹井ではえぐられたような痕跡も認められることから、³⁰井が湧いていた³¹井がある。³²井は少しだけしかだが、13世紀前半に廃止する伊賀窯の³³伊賀窯を確認している。

溝SD36 SD24と³⁴井、第1冰床まで検査された溝の延長部であり、U 8~X 8で検査した。³⁵溝部は傍壁に堆積されており、その堆積より³⁶井へは通れない。規模は長さ約14m、幅1.7m、深さ

0.96mである。断面形はU字形である。第1冰床まで検査部をあわせると³⁷井はおよそN 2° Eで、SD24と平行する。形状も類似していることから、



ゆらかの關係のもと壊された跡がある。E層から14世紀後まで¹²の車軸跡系の「伊賀」がE層している。従って、撫養時代後から主に時代伊賀の遺構と見えられよう。

溝 S D 5 3　　渕を头部T 9～S 12で検出した丸く延びる溝である。規模は長さ約12m、幅約2m、深さ0.73mである。断面形はU字形に近い。南北はおよそE 10° Nであり、南北に延びるSD 24・SD 36とは接していない。北への延長については、丸腹断面のSD 24と南北の二層が下甲界であり、さらにSD 24・SD 36とやわらかと思われる箇所に大きな境が付くため、残念ながら下甲界である。従って、境まで終息するかSD 24に連続する、もしくは渕を丸腹へさらに延長するという3つの可能性がある（第5号）。このから13世紀末～14世紀後と見えられる車軸跡系の「伊賀」がE層している。

溝 S D 5 7　　SD 24とSD 36をつなぐように検出された丸く延びる小さな溝である。規模は長さ2.6m、幅0.6～0.9m、深さ0.36mである。南北ではやはりあいが下甲界であったが、サブトレンチを事にして確認した結果、SD 24・SD 36に平行することが確認された。E層にも丸く延びる小さな溝状遺構が確認されたが、その性格については下甲界である。E層は非常に少なく車軸跡下甲界だが、SD 24とSD 36との關係から撫養時代以前の遺構と見えられる。

溝 S D 5 5　　Q 12で検出した南北に延びる小さな溝状遺構である。規模は長さ3.7m、幅0.6mで深さは0.14mと浅い。撫養時代以前とされる「伊賀」がE層で検出している。

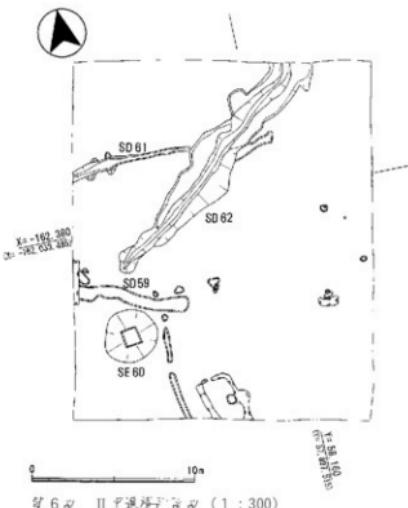
井戸 S E 5 1　　渕を車軸跡W 8で検出したE層で、SD 24とSD 36の間に位置している。規模は長さ1.6m、幅1.4mで、縦井形である。確認後から深さ約2.5mである。底まで確認できたが、井筒等の柱ではなく、二層断面でも倒立形のものは確認できなかつたため、系繋りであると見えられる。しかし、最底部には雪が詰められたため、柱筒等を増えていた可能性がある。なお、第13号の4層E層では甲界な層ができなかつたため1層手配だが、さらにE層できた可能性もある。E層遺構は痕跡のみであるが、骨器塊、いわゆる「茶塙」がE層からE層している。このことから遺構の建設当時は13世紀前半の当期に求めることができよう。また、E層が数点出土したが、この中は発見されたものはない。

土坑 S K 5 4　　渕を車軸跡R 12で検出した。規模は長さ約1.4m、幅1.1m、深さ約0.11mである。南北は丸窓型であり、南北とは明らかに異なるが、輪郭が下甲界であった。また、底辺には具脚木によると思われる痕跡が多く確認されており、SK 54も廃止した遺構であるとは言いたい。撫養時代以前とされる「伊賀」がE層で検出している。

不明構造 S Z 5 8　　渕を車軸跡で平行してE層に広がる遺構である。渕を車軸跡で平行してE層に広がる遺構である。南北に延びて平行トレンチをあけたところ、深さ0.6mあたりで砂層が薄く検出され、それからすぐに砂礫層が検出された。深さ0.8mまで確認したが、砂礫層以降からは遺構はE層で確認されない。これらのことから、川もしくは積の飛弾の可能性が見えられる。E層遺構はE層の「伊賀」が多いが、骨器塊のE層がE層しておらず、撫養時代の所産と判断した。

(4) 江戸時代の遺構

溝 S D 5 2　　渕を車軸跡T 12で検出した丸く延びる小さな溝で、SD 37を切っている。長さ2.6m、幅0.3mである。骨器塊がE層しておらず、江戸時代の遺構である。



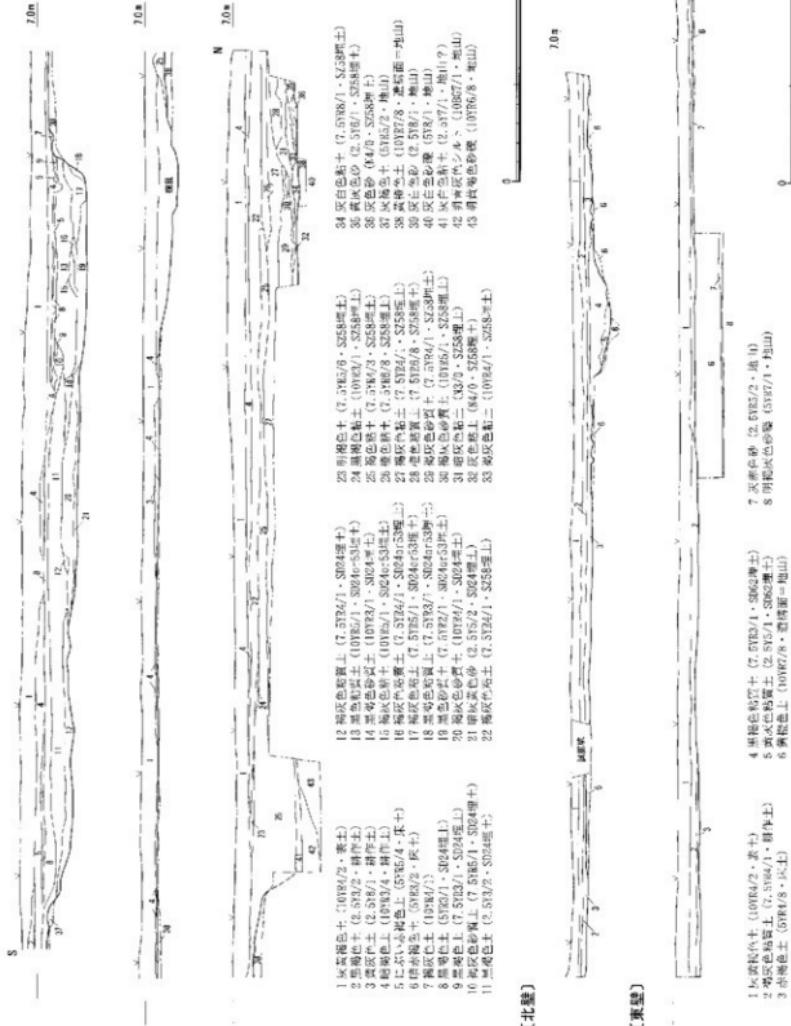
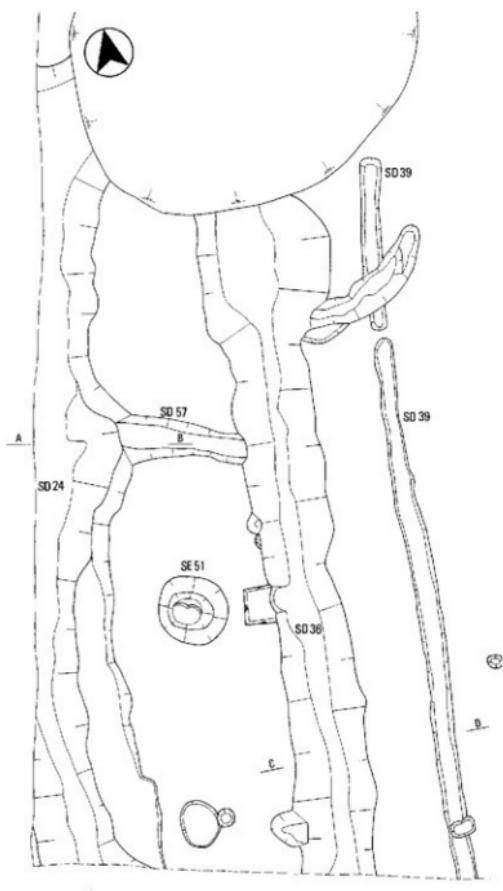
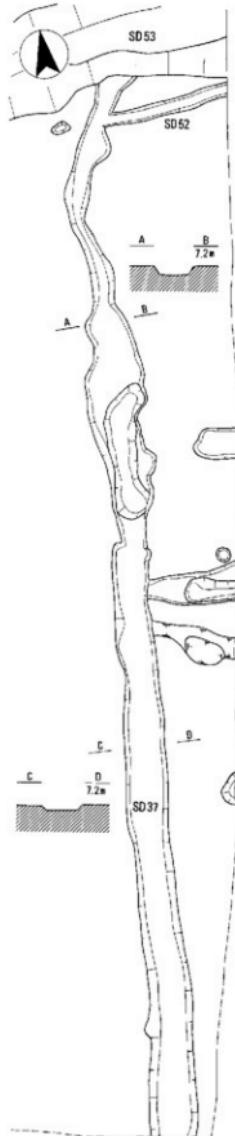


图 7 北壁 地质剖面图 (1 : 100)

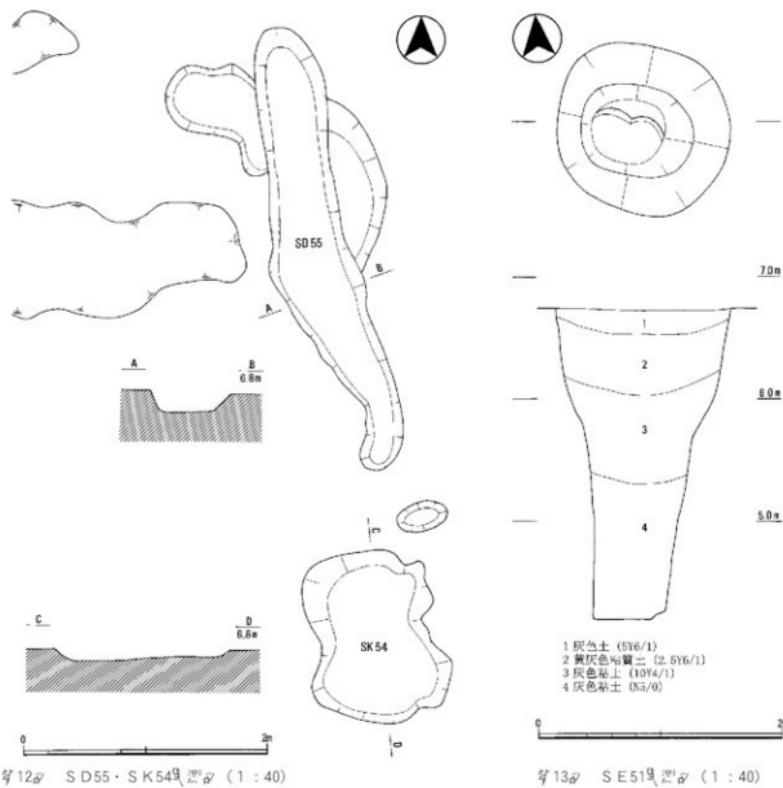
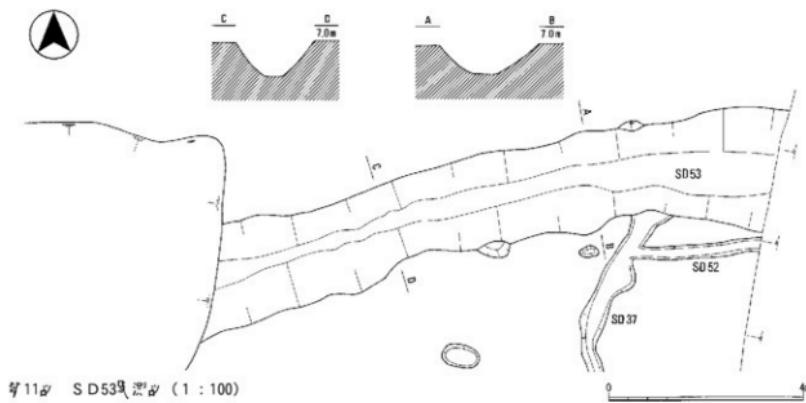
图 8 東壁 地质剖面图 (1 : 100)



498 S D24 - 36 - 39 - 57 (1 : 100)



第 10 页 S D 37 · 52 第 1 页 (1 : 100)



Ⅲ 当代の所産と考えられる。

井戸 S E 6 3 S Z 58 の東端部で確認したとき 1.8m の柱状である。断面を行った結果、深さは 2.5 m と測定した。形状は丸く、脇脛が付いていることから、江戸時代の窓の遺構であると判断した。

(5) 柱状窓の追跡

溝 S D 3 9 溝を走る東部 U 9 × X 9 で検出した。この溝も第 1 次調査で検出されているが、幅 0.5m と近く、深さは東部で 17cm あるものと認めた。

では 9cm と浅くなり、V ラインで述べている。方位はおよそ N 1° E であり、S D 24・S D 36 とほぼ平行する。柱状遺構は非常に少なく、柱状片が数点見出しているが、少片のため詳細不明である。

ビット M 1 2 - P 1・N 1 2 - P 1 - P 5 他

溝を走る東部の M 1 2 - N 1 2 の附近において、小さな丸窓に長いビット群が検出された。窓は丸く、直径の半分がマーブル状にくりこんでおり、やや珍しい。これらのビット群よりも東側に位置する遺構とは窓の形が異なる。

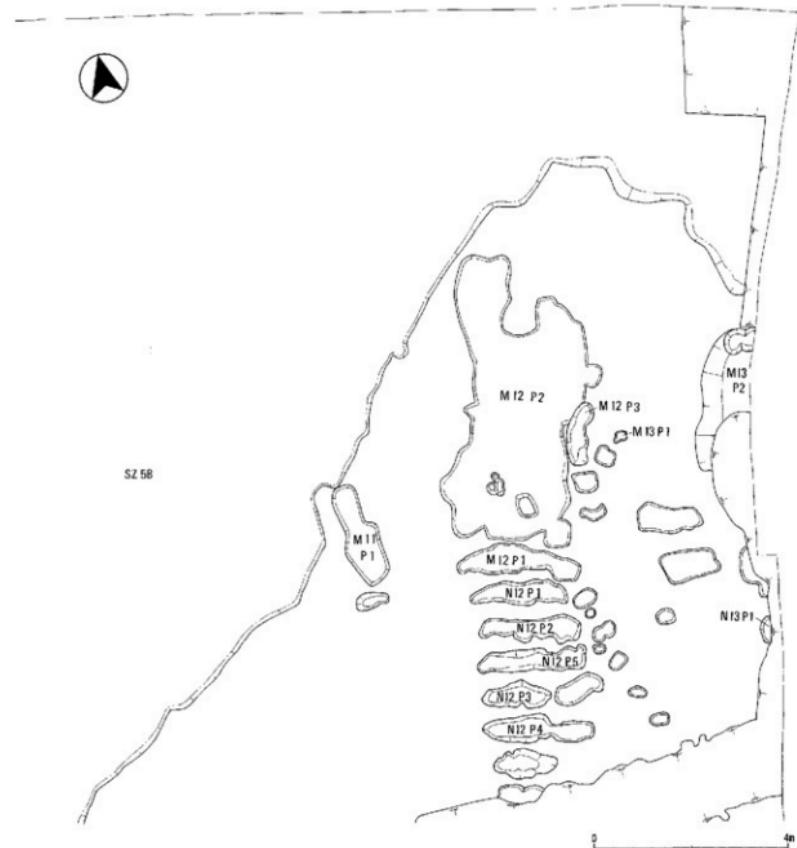


図 14g S E 6 3・ビット及び窓 (1 : 100)

2 II区

(1) 溝の層序

基本的には、上から底上（底床場合）・10YR4/2）、
堆土（堆床在断面下・7.5YR4/1）、底上（6堆在
下・5YR4/8）、道構柵門底および堆土（底床在
下・10YR7/8）である。道構柵門底では、上から底床
在（2.5YR5/2）、堆床在断面下（5YR7/1）と続く。
道構柵門底の上層には堆角は含まれておらず、
堆土と看えられる。

(2) 池下前代の堆角

溝 S D 61 溝を南北部 S 14～T 14 に沿う

する東北に延びる溝で、S D 62 に平行する。規模は
長さ7.5m、幅0.3～0.6m、深さ約0.5mである。底
は堆角は非常に少ないが、底上時代の堆の痕跡が見
こしている。

井戸 S E 60 溝を南北部のV13～W13に
おいて検査した溝である。第16号の5層以上の層
は屢々多く混じる堆角を含むたのであり、少くとも
新しい時代の所産であると看えられる。しかし、検
査孔より深さ約1m付近で壺形やひだ形を検査
した。壺形は1辺約1.5mの圓錐形を呈す。ひ
だ形は、辺約1mである。

ひだ形は板状を縦方向に延び、やや側に傾けて柱に

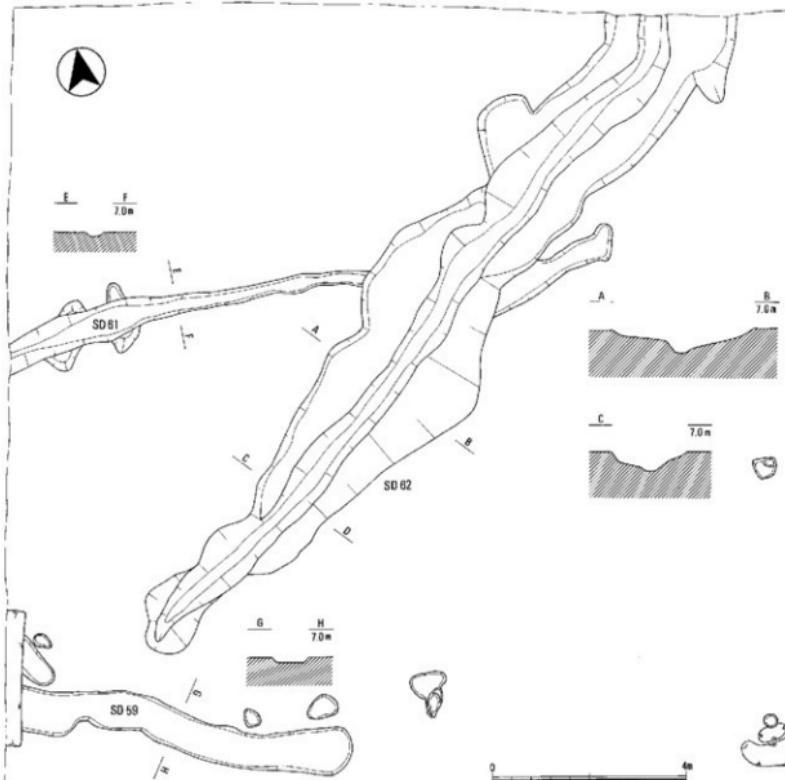
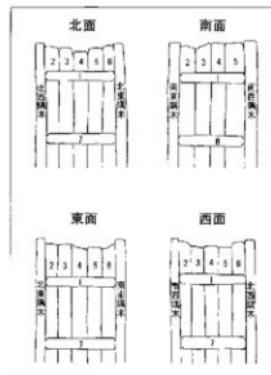
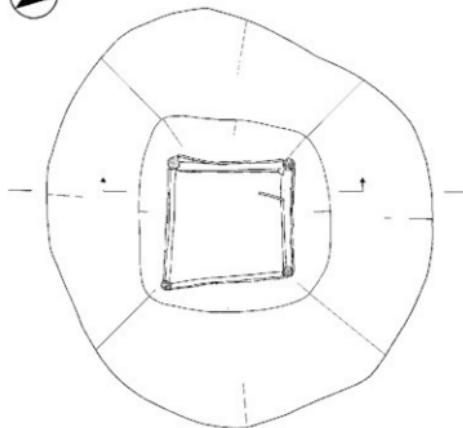
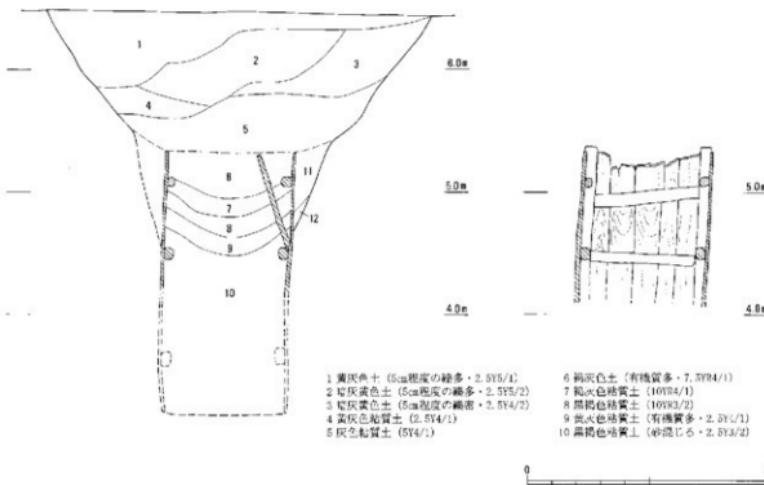


図 15 溝 S D 59・61・62 溝を南北部 (1 : 100)



SE 60号墳 墓好鉄上げ部の付近の断面
(復元図)



第16号 塚 E 60号 塚 (1 : 40)

取り付けた横桟で保護しており、いわゆる錆坂錆鷲柱横桟どめず戸に相当する⁶。横桟は鷲柱のほぞ穴に差し込んで組まれていたが、3男まであることが確認できた。また、鷲柱の上端部は切断された形を残しておりこの上に被くとは考えられない。そのかわりに5層以上には腰留金の鉢などが増えられていた可能性がある。従って、戸戸を検査した傍で上層の鉢等をゆき取り、確認して尋めたとを考えられる。

さらに、戸戸側の内蔵鷲柱の上に留番のある木柱が目撃した。また、戸戸側から簡がかけられた竹竿を組みにねさった状態で確認した。竹竿は直径3.8cm、長さ76.6cmで、端部は2号⁷の横材に当たっていた。これらの遺物は戸戸の廃棄の際の状況を示していると考えられる。

戸戸の堅御は深さ3.3mまで行ったが、潜りがひどく甲冑な底部を確認することはできなかった。また、鉢等の確認もできなかった。第6層から通路の壁が柱に当たっている。このため、江戸時代の遺構と想われる。

溝 S D 6 2 潜りを上部に位置する長さ約17m、最大幅2.2m、深さ約0.5mの溝である。断面形状は溝の上部部分のみさらに深くなる形状である。方位はおよそN45°Eである。遺物は全く目撃していない。

ないが、SD61を押していることから江戸時代以降の遺構と想われる。また、溝の上層がS E 60⁸に近い位置していることから、向らかの関係のもとに埋められた可能性も否定できない。

(3) 溝及び戸戸の遺物

溝 S D 5 9 潜りを左側にある長さ7.2m、幅0.8m、深さ9cmの非常に浅い溝である。戸戸遺物は全くなく、馬鹿の足⁹は発見。

(野原・久慈子)

[註]

- ①津屋松島「江戸の木型宝庫戸戸櫻からえ得をえる」(『櫻と象そのデザイン』第4回奥井幸之助フォーラム、1996年)。
- ②第1水車模型模型会社氏、山口篤氏のご教ふによる。
- ③三日月義和アドセンターエスの多邊へ「鉢」について(『江戸の土器から江戸の文化』、1996年)。
- ④佐野利行「茶碗御用の瓦舟と瓦屋」(『江戸足跡』第3号、三日月義和アドセンター、1994年)。
- ⑤守谷繁「瓦舟」(『江戸』65~5、1982年)。
- ⑥小川千賀「櫻坂・櫻坂一その立ち字」(『江戸足跡』第7号、さくら園出版専門館、1985年)。
- ⑦吉田健一「江戸時代えれ草の多邊」(『江戸時代のえれ草』堺アート館アドセンター、2003年)。

遺構番号	調査区	大地区	小地区	性格	時期	長さ (m)	幅 (m)	深さ (cm)	備考
S D 24	I	E	T 7 ~ X 7	溝	鎌倉	17	2.9以上	69	第1次調査の延長
S D 36	I	E	U 8 ~ X 8	溝	鎌倉~室町初頭	14	1.7	96	第1次調査の延長
S D 37	I	E	S 12 ~ Y 11	溝	平安末期以降	22	1.2	17	第1次調査の延長
S D 39	I	E	U 9 ~ X 9	溝	不明	15	0.5	17	第1次調査の延長
S E 51	I	E	W 8	井戸	鎌倉	1.6	1.4	250	
S D 52	I	E	T 12	溝	江戸	2.6	0.3	4	S D 37を切る
S D 53	I	E	T 9 ~ S 12	溝	鎌倉	12	2	73	
S K 54	I	E	R 12	土坑	平安~鎌倉	1.4	1.1	11	不明瞭な遺構
S D 55	I	E	Q 12	溝	平安~鎌倉	3.7	0.6	14	
欠番									
S D 57	I	E	V 8	溝	鎌倉	2.6	0.9	36	S D 24、S D 36に切られている
S Z 58	I	E	N 9 ~ K 14等	不明	鎌倉	—	—	92	川もししくは沼の痕跡か?
S D 59	II	F	V 13 ~ V 14	溝	不明	7.2	0.8	9	出土遺物なし
S E 60	II	F	V 13 ~ W 13	井戸	江戸	検出3.2 撮影1.5	検出3.2 撮影1.5	330 以上	木札出土
S D 61	II	F	S 14 ~ T 14	溝	江戸	7.5	0.6	17	S D 62に切られている
S D 62	II	F	U 14 ~ S 16	溝	江戸以降	17	2.2	50	出土遺物なし
S E 63	I	E	N 9	井戸	江戸以降	1.8	1.8	250	S Z 58を切る

第1章 遺構アドセンターリスト

IV 遺 物

今までの調査で出土した遺物は、整理簿（コンテナパット）にして16箱である。I型の遺物が最も多い。以降、器物の遺物からIII型の遺構の発達順に並れ、次にSE60以下の未製品について並れていく。

(1) 伊賀系

SD 37 (1・2) 1・2は「伊賀系」の蔵部である。1は「蔵部が付いていた」と記載している。食事はぶいの骨を主とする。2の蔵部はやや反しながら直線的に伸びている。2巻は16.7cmで、食事は燈色である。いずれも11世紀前半のものであろう。

(2) 鉄鉢形～手取形初頭

SD 24 (3～5) 3は「伊賀系」である。4片であるため、5巻は下甲である。5蔵部はわずかに伸びしているものの、折り返しは認められず、5代のものと思われる。5は「伊賀系」である。

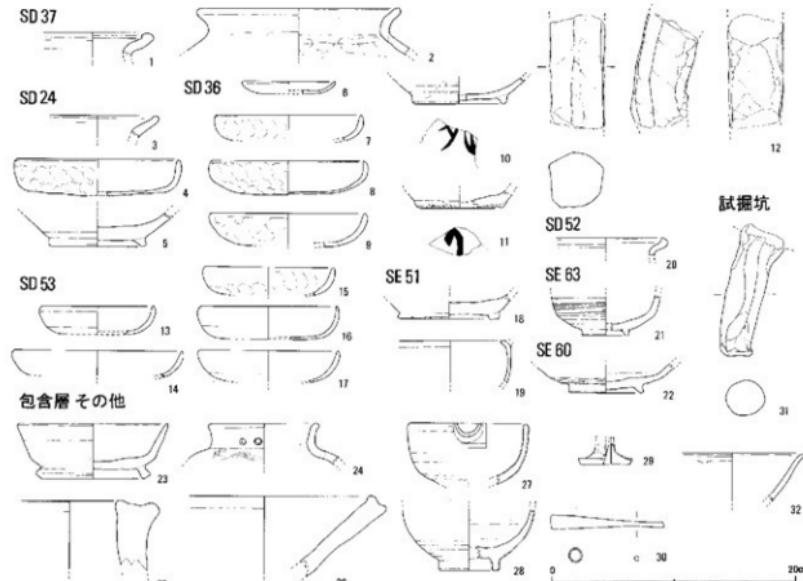
4は「伊賀系」である。5巻は13.5cmとやや大型の

ものである。用意は浅黄燈色を呈する。伊藤裕氏による重井夢IIa期（13世紀前半頃）に匹敵しそうである。

5は「茶碗」である。嘴はしっかりとしたものである。鷹狩山城による扇形の丸型第4型式（12世紀前半～中期）に匹敵する。

SD 36 (6～12) 6は「伊賀系」である。2巻は7.6cmである。食事は灰白色である。7～9は「伊賀系」である。2巻は12.2～13.0cmであり、近似物である。いずれも重井夢系のものであり、IIb期（13世紀後～中期）に匹敵しそうである。

10は仄形身器碗である。底部外側、底部内側はクロナデであり、單り頭部はす略されている。嘴は長く、少し傾む。底部外側に墨書きが書かれおり、「焰」もしくは「宛」の字跡がある。これらの相違から、折手53型式（10世紀後半）に匹敵しそうである。



第17図 さざなみ遺跡の遺物(1:4)

11は「茶碗である。裏面は非常に薄く、底部には模様が残存している。片張型第6型式（13世紀前半）に付属づけられる。また、底部外側に墨書きが書かれているが、小片のため判斷は難しい。

12は又序秋山製品である。上部も下部も本壺しており、全體の形は復元できない。底座には墨書きがあり磨かれているような印象を受ける。後醍醐の痕跡はなく、用途は下呪である。

S D 5 3 (13~17) 13~17は「伊賀焼」である。口巻は13が9.6cmとやや大型であるが、15~17は10.8~11.6cmと近似である。14は口巻が14.0cmであり、小型の脚部による。食事は13・15・16が浅鉢型を呈し、14・17は伏せ食をする。いずれも口巻部はやや厚みをもつが底部は非常に薄く、中古勢IIb期に付属づけられよう。

S E 5 1 (18・19) 18は「茶碗である。裏面の墨書きは脚立な形を呈しており、片張型第6型式（13世紀前半）と思われる。裏面底部には模様が残存している。

19は「軸」と思われる「伊賀焼」であるが、口巻の口巻部であるが底部も復元できない。口巻部は底部には脚立を呈しており、その墨書きには脚立がある。食事は浅鉢型を呈する。

(3) 江戸時代以前

S D 5 2 (20) 20は「伊賀焼」である。小片のため口巻は下呪である。食事はにぶい握食をする。口巻部は脚立への折り返しがなくなり、つまり上げるだけになっている。中古勢系の持ても江戸時代のものであろう。

S E 6 3 (21) 21は茶碗である。底部外側にはカキメが残されている。源氏中期第9小片と思われ、19世紀前半に埋入する。

S E 6 0 (22) 22は輪托である。底部外側に輪状に墨書きがされていない箇所がある。源氏中期で、通馬第5小片と見えられ、17世紀末にあたる。

(4) 包含層ごと追跡（23~30）

23は須恵器である。口巻は12.4cm、裏面口巻は9.4cmである。底部は底部からすり下して直線的にのびる。裏面はあまり高くなく、底座は外側に向いている。近衛三氏の構造のTK48~MT21型式（7世紀末~8世紀初頭）に埋入しよう。

24は「伊賀の茶釜である。口巻部に2筋1枚の脚立が残っている。底部外側はハケが墨書きされている。食事は浅鉢型を呈する。

25は常滑窯の樂である。單耳であるため口巻は下呪であるが、大型の樂であると思われる。食事は握食を呈する。26は常滑窯の樂である。食事は握食である。

27はHリヤ焼である。外側には浅鉢型の形が墨書きされているが、内側には脚立のない部分がある。又風磨窯で19世紀前半のものと思われる。

28は身背焼である。外側には伏せ食の形が墨書きされているが、内側は墨書きされていない。脚立のものと思われ、江戸時代の所産である。

29は又風磨窯の樂である。底部外側には手切り渠が墨書きに残している。当期は通馬第8~9小片と思われ、18世紀末~19世紀前半に埋入する。

30は脚立のキセルである。長い脚立で口巻1.05cm、短い脚立で口巻0.4cmである。

(5) 純正御器皿食器追跡（31~32）

31は湯もしくは三湯の脚立と思われる。外側にはほとんど手をもたず、墨書きは口巻約3.2cmでリムに近い。食事はにぶい握食を呈する。中勢では脚立をもつ湯は脚立が少なく、この追跡が湯であるとすれば珍しい江戸時代であろう。

32は「坂焼」の口巻である。小片のため口巻は下呪である。口巻部はわずかに外反し、底部は直線的である。

(6) S E 6 0 など水製品（33~57）

33~55はS E 60E上の水瓶である。このうち、33~40は陶器にてられていた異物である。口巻10cm中勢の水瓶を使用している。瓶上部にあった33・38は上部にて断された手を残している。また、瓶柱には板机の柄を差し込む長方形の柄穴がほぼ直角に二つあいている。丸く底面のよい33では約60cmの重量をあけて二つの柄穴が残存している。柄穴は縦約8cm、横約4cmである。

41~47は縦板である。44~47は1枚につき5枚の縦板が墨書きされていた（一・又・丸型（第16号参考））の縦板である。これらの縦板は16.0~18.0cmである。一方、4枚の縦板が使用されていた墨書きの縦板（41~43）は21.0~23.4cmと幅が広い。

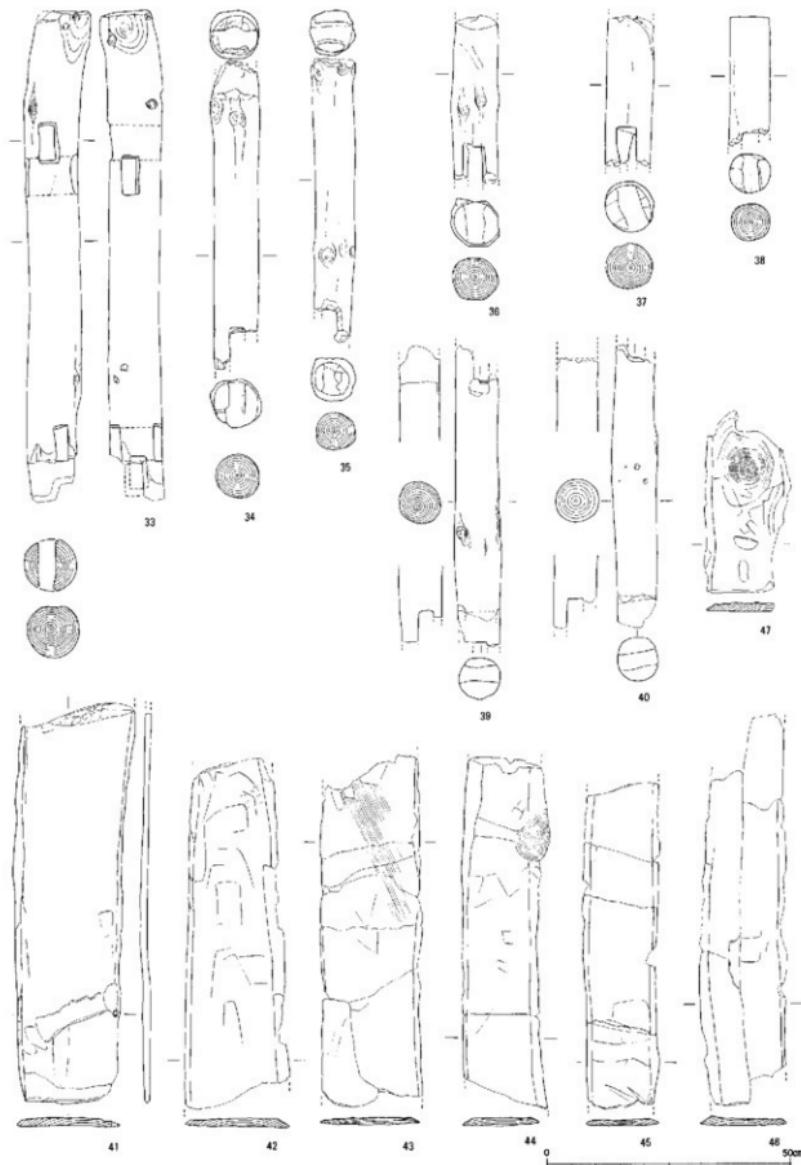


图18^g S E60^号王子青铜器 (1 : 10)

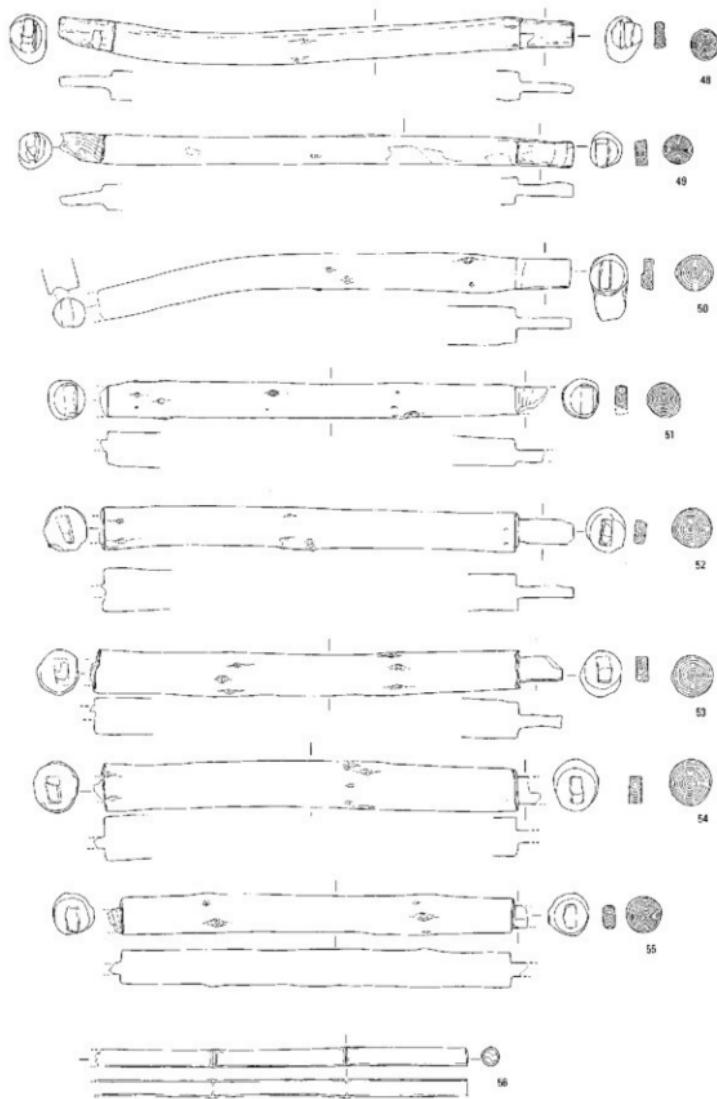


图 19B SE 60° 于平顶山·鲁山带鱼化石 (1 : 10)

48~55は偶然にとりつけられた焼残である。直径7~8cm軸径の木柱を使用している。長さは90~100cm軸径である。内蔵に墨でさし込む柄をもつ。

56は矢張りとして使用されたと思われる向かひかれた竹箸である。直径3.8cmほどの中空竹を使用しており、残存長は76.6cmである。

57は生糸の糸柱の上にF了した木丸である。F了の一部は矢張しており、長さ41.1cm、幅9.3cm、厚さ0.5cmである。糸には墨書きが残っているが、その向きについては次節を参照されたい。

(57) 美沙子

(7) S E 60 ざくみれ (57)

奈良県宇陀郡野村から、和歌山県東部熊野町にまたがる大室山系は、山頂より篠道のルートとして知られている。近江・熊野五道のルート、大室表篠道として世界遺産に登録されている。篠道は林々なぎ行や宿場により歴史をさかじしようとする行者達により現在まで延々と受け継がれている山道留である。近畿以降、篠道の行者は二伏ともいわれ、そのための宿泊行以外に、リピートの余裕した修行成りを一段の日々に「研修」という姿で表現し、それに付随するのみの「大室宿」や「大室裏宿」を構成している。そのような漢の好みである「笠道」や「大室道」として修行を含めた行見遊遊的な登録をおこなっている。その弊、伝統や豊饒の象徴として紙・木・金属製の研修札を作成している。今後F了の木丸もその一例とみられる。

で守付省はF了であるが、墨跡の字跡が渋しく、判別はまことに含まれていた地図をどうしておこなった。

都御

「
都御付印 旨 野山
(カンマン) 本院大室山 通称御意研修
三月六日 □ □ □
(櫻子) ?

・(カンマン)は下駄印と著者印の選択印に書かれている梵字である。(カンマーン)の可能性もある。
・□□□は署頭名が記されていると考え方される。

(写真法) 木元鉛筆で(57)印を所 著者 広義
(註)

①: 研修札についてはF了の字跡に写った。

新? F了「カタ当代~オサにおける対達印と「色勢印」薄一に

契約する旨の文書」(三重守ら守印考) 1、三重守ら守印考、1985?)

井松信彦「オサ守印証の「手稿」に関する試験」(Mie history vol. 1, 三重守ら守印考、1990?)。

井松信彦「オサのオサ対達印と三器から朱印をえる」(『湯と象のデザイン』第4回 久喜守ら守印フォーラム、1996?)。

②: F了印についてはF了の字跡に写った。

三重守ら「オサ対達印と印證センター」「F了の多様へF了印について~」(『F了』1995年1月号第1号第1号)、1995?)。

井松信彦「オサ対達印におけるオサ・ムセ・シムの「三種類」」(『開失・朱印におけるオサ印・対印・身印の最近における印を成す』、第19回印・身印講義) 三重守、2004?)。

③: F了印についてはF了の字跡に写った。

井松信彦「『茶碗印の記念と儀式』(印を記す) 第3章、三重守ら著『印證センター』、1994?)。

④: F了印、「4. 旅館物語・山茶碗」(『旅館』、オサの「器・身造器」、1995?)。

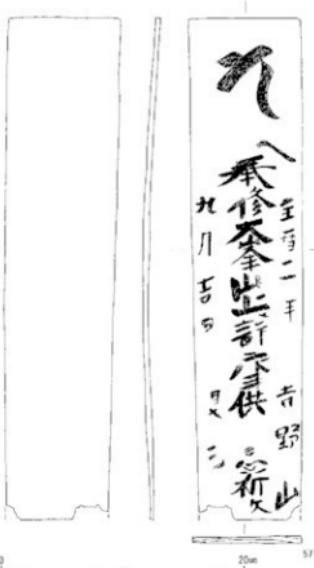
⑤: 井松信彦「F了の「F了」当代の謹」(『F了』当代の謹) 井松信彦、井松信彦「F了」(『湯と象のデザインセンター』、2002?)。

⑥: 井松信彦の著書については井松信彦氏ご自身による。

⑦: 近江三「尊きる愛だ根!」(『安全守』、1966?)。

⑧: 近江三「旅館器ト庚」(『印川書店』、1985?)。

⑨: 井松信彦「旅館印」(『旅館』、1976?)。



等20mm S E 60 ざくみれ (1 : 4)

報告番号	実測番号	種類	器種等	出土位置	法量(cm)		調整技法	胎土	焼成	色調	残存	備考
					口径	底径						
1	003 -05	土師器	壺	E-U11 SD37		残 1.9	ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 1/12	外面ス付着
2	003 -04	土師器	壺	E-U11 SD37	16.7	残 4.0	外面ナデ、内面オサエ・ナデ 口縁部ヨコナデ	密	良	橙 SYR6/6	口縁部 2/12	
3	002 -06	土師器	壺	E-V7 SD24		残 1.8	ヨコナデ	密	良	灰白 10YR8/2	口縁部 1/12	
4	002 -01	土師器	皿	E-V7 SD24上層	13.5	3	外面オサエ・ナデ 内面ナデ、口縁部ヨコナデ	密	良	浅黄橙 10YR8/4	口縁部 3/12	
5	002 -08	陶器	山茶碗	E-V7 SD24上層	8	残 2.8	外面ロクロナデ、貼付ナデ・糸切痕	密	良	灰白 5Y7/1	底部 11/12	尾張型第4型式
6	002 -05	土師器	小皿	E-V8 SD36下層	7.6	1	外面オサエ・ナデ 内面ナデ	密	良	灰白 2.5YB/2	口縁部 4/12	
7	002 -04	土師器	皿	E-V8 SD36下層	12.2	2.1	外面オサエ・ナデ内面ナデ	密	良	浅黄橙 10YR8/4	口縁部 3/12	
8	002 -02	土師器	皿	E-U8 SD36下層	12.8	2.8	外面オサエ・ナデ内面ナデ	密	良	灰白 10YR8/2	口縁部 4/12	
9	002 -03	土師器	皿	E-V8 SD36下層	13	2.6	外面オサエ・ナデ 内面ナデ、口縁部ヨコナデ	密	良	橙 7.5YR7/6	口縁部 9/12	
10	003 -01	陶器	灰胎陶器	E-V8 SD36下層	7.8	残 2.1	外面ロクロナデ、貼付ナデ・糸切痕	密	良	灰白 2.5Y7/1	底部 3/12	墨書きあり 折戸S3型式
11	003 -02	陶器	山茶碗	E-V8 SD36下層	7.4	残 1.4	外面ロクロナデ、貼付ナデ・糸切痕 内面ロクロナデ	密	良	灰白 2.5Y7/1	底部 2/12	墨書きあり 尾張型第6型式
12	003 -03	石製品	支脚状	E-X8 SD36	幅 4.5	残長 9.2						
13	006 -5	土師器	皿	E-S11 SD53下層	9.6	残 2.3	ナデ	密	良	浅黄橙 10YR8/3	口縁部 2/12	
14	006 -4	土師器	皿	E-S11 SD53下層	14	残 2.1	ナデ	密	良	灰白 2.5YB/2	口縁部 2/12	
15	006 -3	土師器	皿	E-S11 SD53下層	10.8	残 2.2	オサエ・ナデ	密	良	浅黄橙 10YR8/3	口縁部 4/12	
16	006 -1	土師器	皿	E-S11 SD53下層	11.6	2.7	ナデ	密	良	浅黄橙 10YR8/3	口縁部 6/12	
17	006 -2	土師器	皿	E-S11 SD53下層	11.6	残 2.6	ナデ	密	良	灰白 2.5YB/2	口縁部 4/12	
18	004 -01	陶器	山茶碗	E-W8 SE51上層	残 2.1	外面ロクロナデ、貼付ナデ・ナデ 内面ロクロナデ	密	良	灰白N7/0	底部 11/12	尾張型5型式	
19	004 -02	土師器	十把?	E-W8 SE51上層	残 3.6	内面ナデ 口縁部ヨコナデ・刺離	密	良	浅黄橙 10YR8/4	口縁部 1/12		
20	003 -06	土師器	鉢	E-T12 SD52	残 1.5	ヨコナデ	密	良	にぶい褐 7.5YR6/3	口縁部 1/12	外面ス付着	
21	004 -04	陶器	糸目瀧呑物	E-N9 SE63	3.9	外面カキメ 3.4 内面外施胎	密	良	焦跡-灰白2.5Y7/2 素地-灰白10YR8/2	口縁部 4/12	瀬戸美濃産 第9小期	
22	004 -03	陶器	輪类型	F-V13 SE60	2.4	施胎	密	良	灰白 2.5YB/2	底部 3/12	瀬戸産 連房第5小期	
23	002 -07	須恵器	杯	E-V7 SD24	12.4	9.4	外面ロクロナデ、貼付ナデ・ナデ 内面ロクロナデ・ナデ	密	良	灰 NS/0	口縁部 3/12	混入と思われ 包含層後かい
24	005 -04	土師器	茶釜	E 表土	9	外面バケ 3.4 内面ナデ 口縁部ヨコナデ	密	良	淡碧5YR8/4 断面オーラ-7黑 7.5Y3/1	口縁部 1/12	2個1対の孔	
25	005 -02	陶器	壺	E 表土		残 5.7	回転ナデ	やや粗	良	褐灰 7.5YR4/1	口縁部 1/12	常滑産
26	005 -01	陶器	鉢	E-O11 搅乱		残 6.7	回転ナデ	やや粗	良	橙 2.5YR6/6	口縁部 1/12	常滑産
27	005 -05	陶器	片口碗	E 表土	10	残 5.0	施胎	やや密	良	施胎-浅碧2.5Y7/4 素地-灰白2.5Y8/2	底部3/12	美濃産
28	005 -06	陶器	楕	F 表土	5	残 5.1	外面施胎 内面ロクロナデ	密	良	施胎-灰白2.5Y7/1 素地-灰白5Y7/1	底部5/12	肥前産
29	005 -03	陶器	秉燧	E-O12 搅乱	4.4	残 1.8	底部糸切痕	密	良	施胎-黑SYR17/0 素地-灰白5Y8/1	底部完存	美濃産 第8or9小期
30	006 -7	漆製品	キセル	E-T8 搅乱	径 1.05	長 9.25						
31	015 -02	土師器	脚部	試掘坑	径 3.2	残 10.8		密	良	にぶい褐SYR7/4 7.5YR7/4		鏡か土馬の 脚部
32	015 -01	磁器	白磁碗	試掘坑		残 4.0	施胎	密	良	灰白5Y7/1	口縁部 1/12	

年 2 月 2 日 12 時 30 分 2023 年 2 月 2 日

報告番号	実測番号	種類	取上げ番号	法量(cm)			備考
				残長	幅or径	厚さ	
33	011-1	隅柱	北西隅木	100.2	11.7		端部残存良好
34	009-01	隅柱	南西隅木	62.9	10.3		
35	009-05	隅柱		58.1	9.2		
36	009-02	隅柱	北東隅木	34.3	9.9		
37	009-03	隅柱	南東隅木	30.9	9.8		
38	009-04	隅柱		26.4	8.4		端部完存
39	011-2	隅柱	北東隅木	61.6	9.8		
40	011-3	隅柱	北東隅木	58.8	9.5		
41	012-01	継板	南木4	81.8	23.4	1.6	
42	012-02	継板	南木5	71.8	21.5	1.7	
43	007-01	継板	南木3	72.0	21.0	1.5	製材時のノコギリ痕?
44	007-02	継板	北木3	71.9	17.9	1.6	
45	008-01	継板	北木5	66.7	16.0	1.4	
46	008-02	継板	東木6	79.9	18.0	1.8	
47	007-03	継板	西木6	37.2	17.5	1.9	
48	013-01	横桟	南木1	106.1	6.9		
49	013-02	横桟	北木1	105.9	6.5		
50	014-01	横桟	東木1	97.4	7.9		
51	014-02	横桟	西木1	92.0	7.5		
52	010-1	横桟	南木7	97.6	8.0		
53	010-2	横桟	北木7	97.4	8.5		
54	010-3	横桟	東木7	91.6	9.8		
55	011-4	横桟	西木7	86.3	8.3		
56	010-4	息抜筒		76.6	3.8		節は貫通
57	001-01	木札		41.1	9.3	0.5	

等 3 等 S E 60 等 6 等 品質等級

<遺物観察表凡例>

般若番号：やまと唐木の番号に付記する。

朱押番号：追跡朱押の番号に付記する。

種類：「伊櫻、頭丸器などを記入している。」茶碗・灰陶器については「身器」とし、「器種若」欄に「茶碗」「灰陶器」と記入した。

器種若：黒・白・薄などといった器種を記入している。

目印番号：目印したグリッド、道場、番号を記入している。

法寸：ふきぬには、? 番、麻番、器番の款符をcmで記入している。それ以外のものについてはそれぞれの欄にどこか部位の款符を記入している。

測量校法：おおよそを記入した。

用意：？：青・やや青・やや紫・紫の4用意で記入した。

焼成：丸・丸・丸の3焼成で記入した。

倉庫：謝：『新発見埋立倉庫』(小川正志・竹原秀忠編 1994) を基準にしている。

残存：？：？残部もしくは底部に付記して12番の○という手記で記入している。

V 自然科学分析

長邊跡では、SE60Ⅱの木札1点、およびSE60Ⅲの木札6点について摩刻調査を行った。

1 SE60出土木札

(1) 宿毛木札

宿毛木札にみるかの木札（坂野木）、板木札（坂成野木）、板木札（坂伊藤木）の3種類の印片を鋤ア用いて作製し、サフランで染色後、木札をエチルアルコール、n-ブチルアルコール、キシレンで洗浄後塗装した。その後、赤水溶性封筒用いて永久プレバラートを作製し、光学顕微鏡で観察した。光学顕微鏡では写真を撮影した。

(2) 宿毛岩木

端頭は第4手に示し、以下に宿毛岩木となった特徴を記す。

スギ *Cryptomeria Japonica* Bon ひのき形スギ版
坂道等と坂伊藤記庵、坂街記庵からなるが坂伊藤。
木札摩刻道、至り摩刻道は無い。木札から坂伊藤への移行は直線的、坂伊藤部の標は無い。坂街記庵は坂伊藤から坂伊藤への移行が付近に変化する。坂伊藤記庵はスギ型で1分野に2筋えられる。坂伊藤記庵は4分野で1~8筋である。

分布：雪谷、早谷、下部：大川、川原、大川、ヨシとし
て木札詳説

摩刻：常識集本で、既幹地。摩刻30~40m、角溝直径2mに達する。

用途：建築、家具、橋、檜、階段、床、上木、飛梁、影柱、
柵器 等

日工見聞：坂伊藤、坂、麻坂、月・輪、飞梁、柵器 等
（参考文献）

参考文献：坂伊藤『坂伊藤』大河内千尋、木之浦編 II、筑摩社、1979年。

吉川謙一著『坂伊藤』『坂伊藤』、吉川謙一著、1982年。

吉川謙一著『坂伊藤』『坂伊藤』、吉川謙一著、1988年。

（参考文献）吉川謙一著『坂伊藤』、吉川謙一著、吉川謙一著）

2 SE60出土井戸側材

(1) 宿毛木札

木札の坂野木（小川木）・坂成野木（坂木）・
坂伊藤木（坂木）について、鋤ア用い印片を以

致し、ガムクロラールで封鎖し、永久プレバラートを作成した。この永久プレバラートは、光学顕微鏡で40~400倍で観察して摩刻を判定した。光学顕微鏡写真については写真を撮影10に掲載した。

(2) 宿毛岩木

観察した結果、いずれの木札も、以下に特徴によりマツ復縫管束木札と判定された。

マツ科 *Pinus* マツ復縫管束木札

坂道等と坂伊藤記庵、坂街記庵およびセイ・セイモ街道をとりまくエビセリウム記庵からなるが坂伊藤。坂伊藤記庵の坂伊藤記庵の木札群は密次、坂街記庵等の木札は木札にちからて墨跡の押捺が見られる。

マツ復縫管束木札には、アカマツ (*P. densiflora*) とクロマツ (*P. thunbergii*) がある。これはいずれも木葉が落葉などに利用される。

アカマツ：暖帯から温帯の乾燥した暖温地に生息し、木質の活潑地に多く見られ、二木林を形成している。

クロマツ：亞州（東洋界以南）・中国・東洋・洪武・朝鮮半島に分布する。海岸沿いに多く、所により標高800~900mまで生育する常緑針葉樹である。

（株式会社パレオ・ラボ 藤根 久）

番号	取上げ番号	用途	樹種
1		木札	スギ
2	南木2	縦板	マツ属複維管束亞属
3	西木2	縦板	マツ属複維管束亞属
4	西木5	縦板	マツ属複維管束亞属
5		横桟	マツ属複維管束亞属
6	北木6	縦板	マツ属複維管束亞属
7		隅柱	マツ属複維管束亞属

第4章 摩刻宿毛岩木

VI 結語

1 丁長遺跡の変遷

丁長遺跡は、古代官道の延長部が第1次調査で発見されたために新規登録された遺跡である。しかし、古代の所産と確実にいえる遺構は第1次調査、第2次調査とともにこの古代官道のみであった¹⁾。

続く中世には、第2次調査Ⅰ区（以下Ⅰ区）の南部にある溝群を中心とする遺構が認められるようになる。特にSD24とSD36は第1次調査でも検出されている。第1次調査でのSD24からは渥美型第4・5型式（12世紀～13世紀前半）²⁾に属する山茶椀が出土しており³⁾、やはり13世紀前半の遺構と考えられる。一方、第1次調査のSD36から出土した土師器皿は、伊藤編年Ⅲa期（14世紀末～15世紀初頭）⁴⁾に近いものもあるが、中心はⅡb期（13世紀末～14世紀中頃）であり、下っても14世紀後半と考えるべきであろう。また、このSD36以外に室町時代まで下る遺構はない。一方、第2次調査Ⅱ区（以下Ⅱ区）では中世に属する遺構は皆無である。従って、中世の遺構の中心は鎌倉時代前期後半と考えられる。

さらに、江戸時代以降になるとⅠ区での遺構は井戸1基のみとなり、逆にそれまで皆無であったⅡ区では溝数条、井戸1基が確認されるようになる。

このように、丁長遺跡の遺構は時代が下るにつれて北へその中心が移っていくことが指摘できる。

ただし、丁長遺跡は史跡斎宮跡のすぐ近くに立地するにもかかわらず、いずれの時期も全体的に遺構は希薄であり、出土遺物も少ない。第2次調査後に行われた工事立会調査にいたっては、遺構・遺物ともに確認されておらず、遺跡範囲もそれほど広がらない可能性が高いだろう。

2 溝と条里型地割

今回の調査で検出された遺構として、Ⅰ区の溝群が注目できる。SD24は総延長87m以上、SD36は同47m以上であり、いずれも南北方向に延びる（SD24はN2°W、SD36はN2°E）。この2条の

溝は第1次調査で道路の側溝である可能性も指摘されている。しかし、前述したように時期差が見受けられ、Ⅰ区中央部以北には続かず、また2条の溝をつなぐような溝（SD57等）も存在することから、道路の側溝である可能性は低いであろう。

一方、SD53は東西方向に延びる（E10°N）幅2mの比較的大きな溝である。伊藤編年Ⅱb期に相当する土師器皿が出土しており、埋没時期は13世紀末～14世紀中葉と考えられる。この溝はSD24・SD36と約80度の角度で斜交している。また、埋土はSD24と酷似しており、Ⅰ区西壁土層断面ではその関係を明確にできなかった。

これら3条の溝はそれぞれ時期差が認められる。しかし、検出状況や埋土の状況から何らかの関係性がある可能性が高いのではないだろうか。

ここで丁長遺跡の立地する多気郡の条里型地割を見てみよう。多気郡では史跡斎宮跡の南部に斜交条里を最大の特長とする条里型地割が展開していることが知られている⁵⁾。この条里型地割の振幅は、南北軸は真北に対してN7°W～N5°E、東西軸はE4°N～E6°Nである。このうち一部参宮街道と重なって東西に延びる軸線が、斎宮寮方格地割の東西軸と同一方位（E4°N）を示す軸として「多気郡東西基軸線」（以下東西基軸線）とされている。また、東西基軸線と直交関係にある字「上六ノ坪」に西接する軸線を「多気郡南北基軸線」（以下南北基軸線）とされている。これらの基軸線と丁長遺跡で検出した溝群の関係を表したものが第22図である。この図を見ると、東西基軸線が丁長遺跡第2次調査区のⅠ区内を通っているが、東西基軸線上には遺構がないことが分かる。しかし、東西基軸線よりも約10m南にSD53が伸びている。SD53の方位はE10°Nであり、東西基軸線のE4°Nとは6°の差があるが、溝の長さがわずか12mであり、南よりに弯曲しながらさらに東側へ延びることを考慮すれば、東西基軸線とは並行するとしてもよいであろう。従って、SD53は東西基軸線と関わりのある遺構と位置付けられ、第Ⅲ章では不明としていた西側への延長については、その可能性が強まるといえる

のではないだろうか。

一方、南北に延びるSD24・SD36はやや弯曲しているものの、南北基軸線とほぼ並行している。しかし、この溝群の位置的なことを考慮すると、単なる水路として機能していたのではなく、条里型地割に則って設けられた溝といえるだろう。

ここで今後の課題について述べておく。伊藤氏によれば条里型地割の施行は8世紀後葉まで遡る⁵とされているが、丁長遺跡では条里型地割に係る遺構は古代まで遡るものはない。従って、古代における史跡・古跡の周辺遺跡の展開について今後さらに追及していく必要があるだろう。

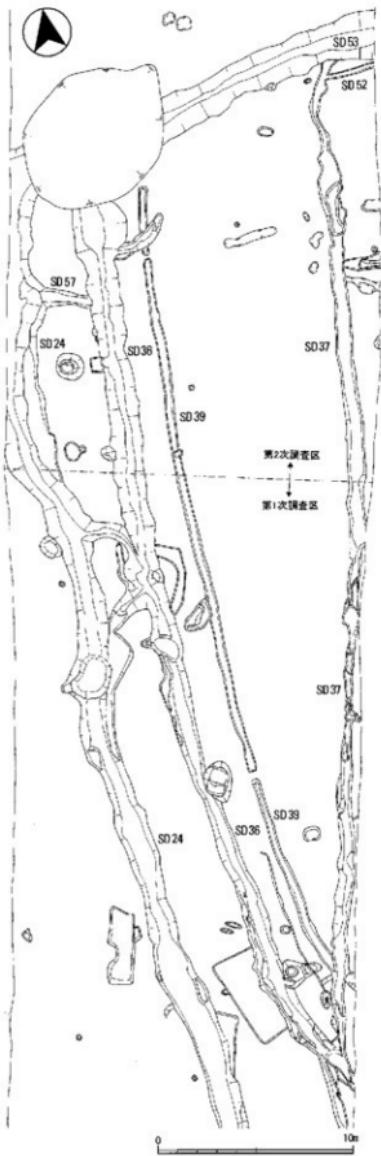
3 SE 60出土木札

II区の近世と思われる井戸SE60から木札が出土した。墨跡から大峯信仰に関する護摩木であることが分かった。『明和町史』によれば、かつて大峯講は町内どの地区でも行われていたが、多くの地区は太平洋戦争の頃に中断したようである。一方で、上村や有爾中では世義寺（伊勢市岡本町）へ柴灯大護摩の大法要に出かけて境内で護摩木の先を柴灯護摩の火で少し焦がして帰るという風習が残っており、この風習も昔は明和町内どこでもあったようである⁶。

SE60出土木札には明瞭に焦がされた痕跡はないものの、下端部が欠損しているため、参拝の際に護摩の火で焦がして持ち帰り、井戸の廻棄の際に埋められた可能性もあるだろう。（野嶋 美沙子）

〔註〕

- ①第1次手写室井戸木札抄本氏、小出宏氏のご教示による。
- ②後藤ルル「『茶碗戸ぞの深次と誤認』（『甲斐記』第3号、三重県立郷土文化センター、1994年）。
- ③小出宏氏のご教示による。
- ④三重県立郷土文化センター「『霊の多賀へ参詣』について～（『家元の手帳』第2号、1996年）。
- ⑤『『丹波守・豊臣秀吉の政治活動』（三重県立郷土文化センター、2006年）。
- ⑥伊藤松寿「高家系・伊勢守・久之」（『高家系史料叢書』甲斐記第13、2004年）。
- ⑦伊藤松寿「高家の庚」（『甲斐記』第12号、2005年）。
- ⑧『ほりふ書記令聖清承業』（『甲斐記』第2号、1975年）より作成。
- 第1次手写室井戸木札の名代の書は、伊藤松寿氏によって認定された御前御本木ぶ記誠の名にむなる（註③、⑦より）。
- ⑨御前御本木さんさん公稿「御記『明和町史』と御算用上卷・下卷、空印記、2004年）。



第21回 第1次・第2次調査区・調査点図 (1:250)

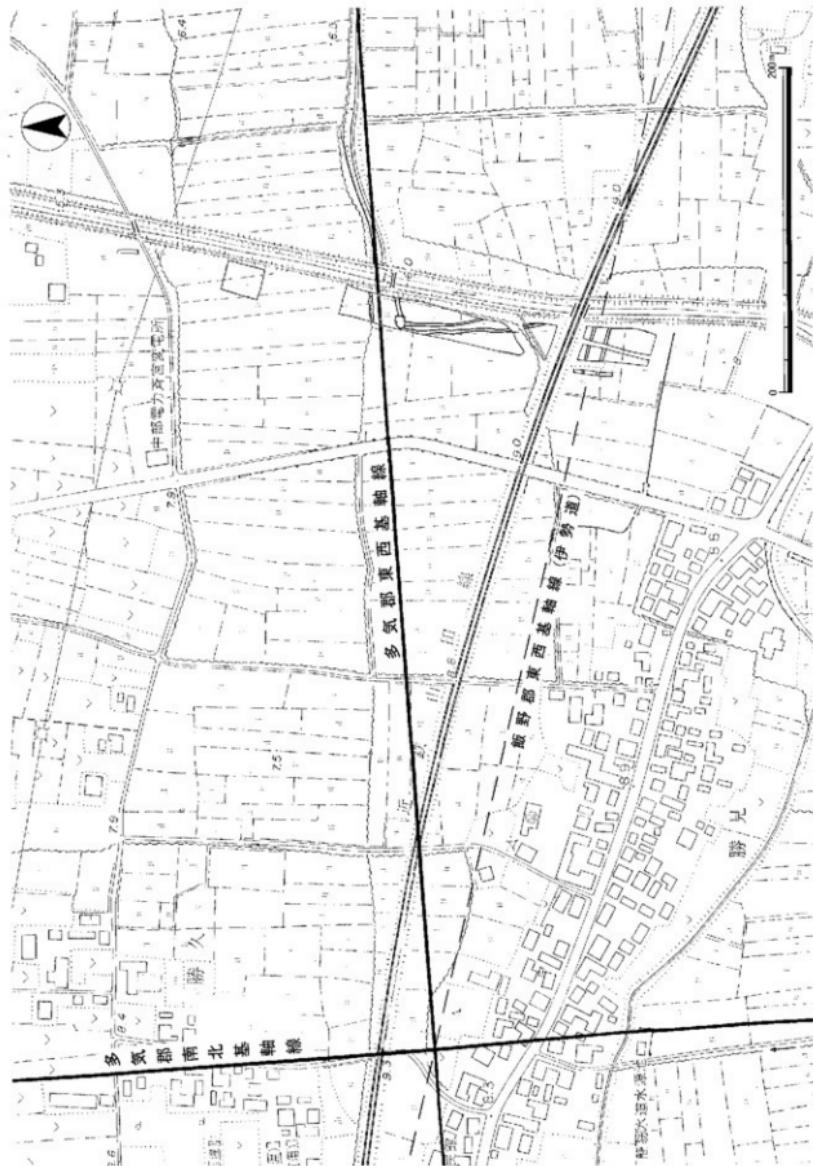


図22a 「玉造路及び伊勢と奈良の関係 (1:3,000)

写 真 図 版



伊勢崎農場 (北から、左は第1次削除地)



1号線 (北から)

写真版 2



I 地盤調査 (左から)



S E 51° 30' 45" (右から)



II D62 (地図から・右は北側)



S D62 (地図から)

写真4



S E 60番地 水道 (上から)



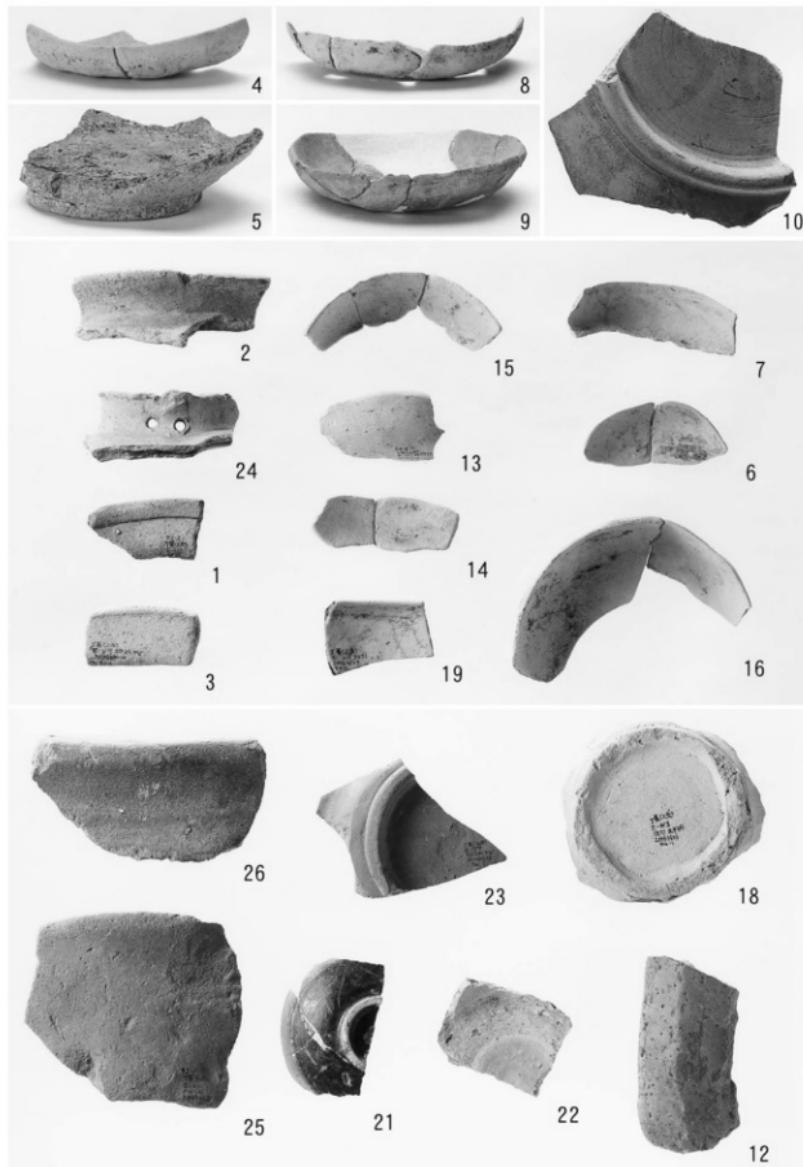
S E 60番地 水道 (下から)



地盤調査（工事場から）



脚注終了後状況（完成から）





S E 60° N 運動身 ①

写真版 8



41



42



57上

S E 60度 退行 ② (57はがく)



57中



57下

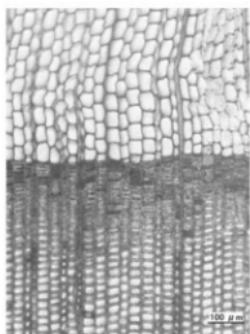


57表

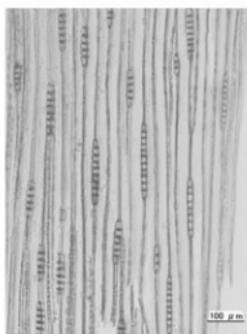


57裏

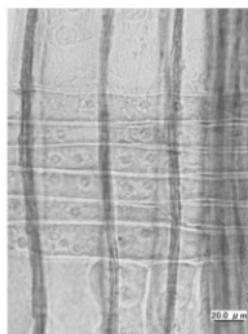
S E 60倍率 速力2000回 (57下は拡大、57表裏は原大表示)



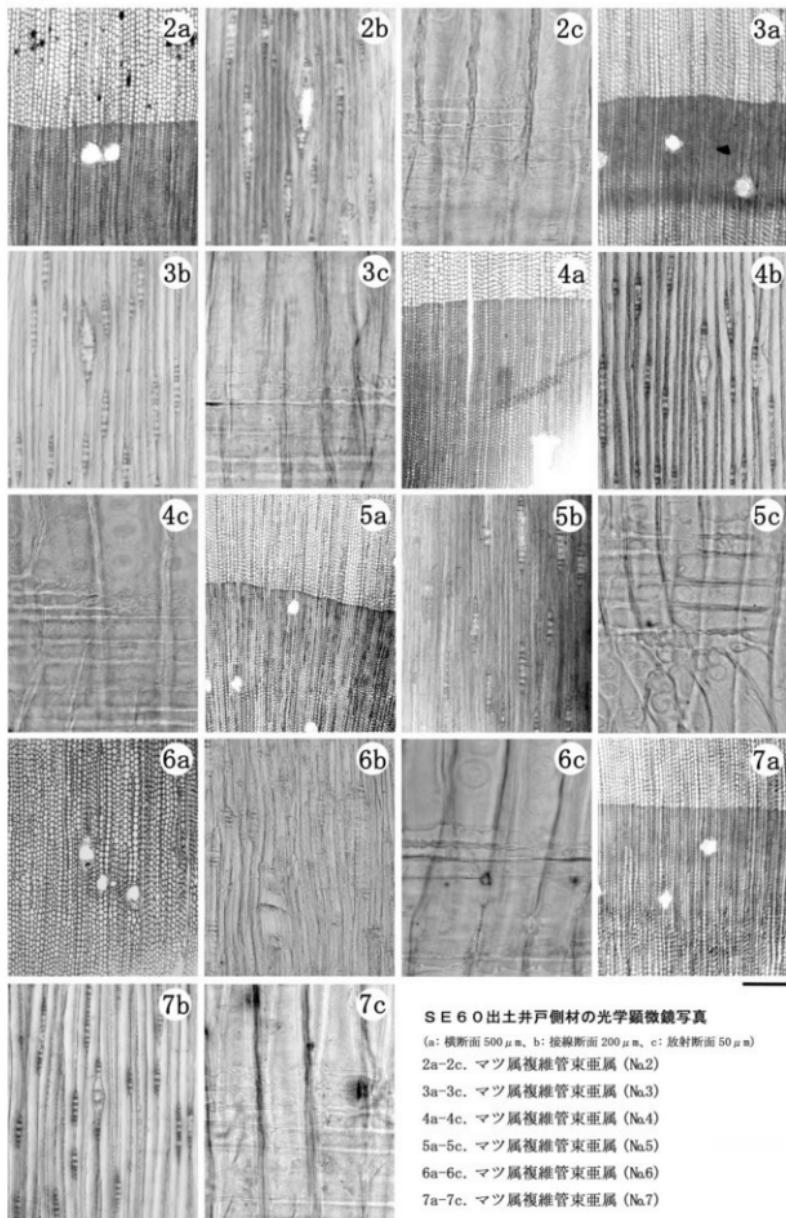
S E 60倍率 みわの山野鶴の左翼試験標本



増殖部



増殖部



SE 60 出土井戸側材の光学顕微鏡写真

(a: 横断面 500 μ m, b: 接線断面 200 μ m, c: 放射断面 50 μ m)

2a-2c. マツ属複維管束亞属 (No.2)

3a-3c. マツ属複維管束亞属 (No.3)

4a-4c. マツ属複維管束亞属 (No.4)

5a-5c. マツ属複維管束亞属 (No.5)

6a-6c. マツ属複維管束亞属 (No.6)

7a-7c. マツ属複維管束亞属 (No.7)

報 告 書 抄 錄

三重県埋蔵文化財調査報告 290-2
丁長遺跡(第2次)発掘調査報告

～三重県明和町斎宮所在～

2007年12月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印 刷 有山文印刷
